

科目名	薬学基礎実習Ⅰ		科目名(英文)	Basic Pharmaceutical Practice I		
学部・学科	薬学部・薬学科	配当年次・学期	1年次・前期		クラス	全クラス
履修区分	必修	授業担当者	相馬 洋平、田村 理、田中 千晶、佐々木 大輔、澤崎 鷹、氏家 和紀		科目ナンバリング	P6003JC
関連科目	有機化学、無機化学、有機薬化学Ⅰ、基礎物理学、物理化学Ⅰ					

#### 本科目が求めるアウトカム・コンピテンシー

薬剤師の活動の基盤となる科学的知識、情報収集、思考、判断の重要性を実感し、具体的な手法について経験を通して習得する。高度な医療及び科学における適切な分析、判断を可能とする基礎的な科学的アプローチを修得し、それらを活用した問題解決能力の習熟を求める。

#### ディプロマ・ポリシーにおける本科目が養う資質・能力

・総合的、専門的な薬学の知識とともに、薬剤師としての実践能力や研究を行うに足る技能を有しているもの  
薬学基礎実習Ⅰは、物理および化学領域に関する情報を扱い、薬剤師として臨床および研究の場で活躍するために、獲得した知識を活用し実践的に物質を取り扱うことで新たな知識を創発的に生み出していく能力を養う。

#### アウトカム・コンピテンシーへの到達に関する評価

基本的な知識の再生のみではなく、薬剤師、薬学研究者に求められる思考、行動を、実験および討議・発表時の行動から評価する。また、レポートでは、実験により得た知見、特に、科学的分析結果から明らかになる物質の性質を解説した上で、その知見を活用した問題解決に至る過程について考察していることを評価する。

#### 授業計画

回	学習内容・課題	学習方法(場所)	評価方法
1	実習全体のガイダンス、安全講習	講義、演習(講義室)	レポート
2	第1クールの導入講義、事前学習	講義、演習(講義室)	レポート
3	滴定に関する定量的実験 ・中和滴定	実習(実習室)	レポート、観察記録
4	滴定に関する定量的実験 ・中和滴定	実習(実習室)	レポート、観察記録
5	滴定に関する定量的実験 ・酸化還元滴定	実習(実習室)	レポート、観察記録
6	滴定に関する定量的実験 ・酸化還元滴定	実習(実習室)	レポート、観察記録
7	第1クールの実習発表および討議	プレゼン(講義室)	レポート、観察記録、発表のプロダクト
8	第2クールの導入講義、事前学習	講義、演習(講義室)	レポート
9	有機化合物の分光分析による定量実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
10	有機化合物の分光分析による定量実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
11	有機化合物のpHによる反応速度の差の確認実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
12	有機化合物のpHによる反応速度の差の確認実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
13	有機化合物のゲルろ過による分離・精製実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
14	有機化合物のゲルろ過による分離・精製実験	実習(実習室)	レポート、観察記録
15	第2クールの実習発表および討議	プレゼン(講義室)	レポート、観察記録、発表のプロダクト

#### 教科書

専用の実習書を用いる

#### 参考書

特に指定しない。

評価時期
レポート（毎回） 実験中の観察記録（3～6、9～14回時） 発表のプロダクトおよび観察記録（7、15回時）
評価方法
レポート（50%） 実験中の観察記録（20%） 発表のプロダクトおよび観察記録（30%）
評価基準
本科目は参加型の学習であり、出席を前提とした教育方略・評価を行う。従って、正当な理由なく欠席した場合は、単位を認めない。 総評価の60%以上で合格。
学生へのメッセージ
大学における初めての実習科目になります。そこで、初回に、実習全般に対する心構えや取り組み方について深く理解してもらおうとともに、安全に実習を行うための講習を受けてもらいます。これらは、今後薬学部で行うすべての実習（基礎、専門、実務）に共通するものになります。 実習内容は、薬剤師・薬学部生として当然知っておくべき基礎的な化学・物理法則に則った現象を観察して、結果について考察してもらいます。実習書の手順通りにただ手を動かすのではなく、その背景についても考えながら取り組むことが望まれます。
担当者の研究室等
研究室 1102(相馬) オフィスアワー:毎週火曜日12:40~13:40 17:30~18:30 研究室 1103(田村) オフィスアワー:毎週火曜日12:40~13:40 17:30~18:30
備考、事前・事後学習課題
実習を円滑に進行させ学習効果を最大化するためには、毎回の実験実習内容に関する予習復習（2時間程度）を行うことが望ましい。また、実験実習後の疑問、不明点に関して自己学習による補完を行いながらレポートを作成すること（3時間程度）。発表用のプロダクトの作成は時間内では困難であると予想されるため、自発的な情報の収集、評価、活用へのべ7～10時間程度は取り組むことが望ましい。